

「なるほど、うまい考えもあるものだ。」と、わたしはひとりでに口にだしていいました。
「だまって寝ましょうよね。」と、ラルスは、あべこべにわたしをせいしながら、もう、すやすやと寝息ねいきになってしまいました。わたしもそれから、ものの五分とたたないうちにびゅうびゅうという雪嵐ゆきあらしの音を、夢の中でのように聞きながらぐっすり寝いってしまいました。

四

あとで思うと、なんだか、二人は、眠ねむっていて、一、二度むにやむにやと話をしあつたような気もしますが、それはぜんぜん気のせいでしょう。ともかく、そのまま、夜どおし、ぐっすりと寝たのです。わたしはいまでもこのときのことを思うと、よこになったわたしの鼻のまえに、子どもくさい、ほかほかした、ラルスの頭の毛があり、ラルスの足さきが、もくもくとわたしのひざの上に乗っているのをまざまざと感じえられます。

こうして、眠りつづけたわたしは、最後さいごに、なんだかかたのあたりが、つかえるような、こわばった気持を、うとうとたたえながら、でも半分はやっぱり眠っているうちに、ひよいと、冷たい風がすうつと顔にあつたので、びっくりして目をさしました。

見ると、ラルスがりょうひじをついて、毛皮けがわをすこしばかりめくって、外を見ています。

「いま六時ごろでしょうよ。空はすつかりはれています。大きな星が一つ見える。もう一時間もしたら、でかけられますね。」

ラルスは、さつきから二人で話していたつづきのようにこういいます。わたしは、よく眠ねむつたので、すつかりつかれもとれて、子どもにでもなったように、すがすがしい気持ちでした。「おい、もう起きて、いこうよ。」と、わたしは元気にみちて、こういいますと、ラルスは、首をふって、毛皮をとぎしました。

「いくといったって、とても道がわかりはしません。」

「一時間たつとわかるのかい？」

「だれかが通りますから。」

こういつてる瞬間しゆんかんに、アキセルが、ヒヒヒンと、たかくなきました。

「ほ、馬が来たな。」と、ラルスははねおきました。

「はやく着物をなおして、くつをおはきなさい。来たきたきた。」と、いうので、わたしはなんのこともかわからないなりに、いそいで身じたくをしました。